



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 17 主日 B 年 (2024 年 7 月 28 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記下 4 章 42 — 44 節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 4 章 1 — 6 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 6 章 1 — 15 節

どこから

三つの朗読から

第一朗読の「食べさせなさい」(42 節) は、神さまの言葉は人間に向かうことを教えてくれます。神さまは特に人間の窮乏きゆうぼうに関心を寄せるのです。そして「主の言葉のとおり」(44 節) から、神さまの言葉は必ず実現する、力があることがわかります。最後に「残した」(44 節) は有り余るほどの神さまからの恵みがあるのが分かります。

第二朗読の「招かれた」(1 節) は心に留めたいです。神さまからの招きは、高ぶることなく、柔和にゆうわと寛容かんようの態度たいどをその人にもたらしめます。

福音朗読には、第一朗読と同じようにパンが増えたという記述きじゆつはありません。またパンを増やすための呪文じゆもんのような言葉もありません。福音では感謝の祈りを唱となえたところだけです。しかし、食べた残りについて語ることで、パンが増えたことが暗示あんじされています。増えたことを伝えるのが二つの朗読箇所しんいの真意ではなかったように思います。むしろ「満腹まんぷくした」という状態じようたい、「しるし」を伝えたかったのではないのでしょうか。

説教：どこから

今週から五週間にわたって、『ヨハネによる福音書』の 6 章が読まれます。ヨハネ福音書では奇跡きせきを「しるし」と呼びます。カナの婚礼での奇跡や、今日の五千人にパンを与える奇跡も、それを通してイエスさまがどなたであったかを知るための「しるし」となるのです。

「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱え」ます。これは、最後の晩餐の時のイエスさまの振る舞いを伝える表現と同じです（マコ 14 章 22 節）。パンの奇跡物語は、他の福音書にも登場します。しかし、『ヨハネによる福音書』だけが、イエスさまが直接パンを手渡したと記しているのは興味深いです。

さて、5 節のイエスさまの問いかけに注目しましょう。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいのだろうか」。フランシスコ会訳は「どこからパンを買って来て、この人たちに食べさせようか」となっています。原文をよく見ると、「どこから」と訳すのが適切なような気がします。訳の是非はともかく、「どこで／どこから」は重要な言葉です。『ヨハネによる福音書』6 章全体を貫くキーワードだからです。

「わたしは天から降って来たパンである」（ヨハ 6 章 41 節 新共同訳）と、イエスさまはどなたで、どこから来たかをはっきりと言います。イエスさまは天から来られた方で、イエスさまはパンなのです。そして、「わたしは命のパンである」（ヨハ 6 章 48 節）と、ハッキリとご自分が誰なのか仰います。

今日の朗読箇所では、「人々に分け与えられた」（11 節）パンがどこから来たのかは誰にも分かりません。もちろん「大麦のパン五つと魚二匹」（9 節）が始めにあったことは確かです。そのことに弟子たちは気がついていません。しかし、五つのパンが五千人に配られた訳ではないのです。

「人々が満腹した」ことで、人々は「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」（14 節）と分かります。ただ、その後がよくない。人々はイエスさまを王にしようと無理やり力づくで連れて行こうとするのです。十字架に架けられて「ユダヤ人の王、万歳」（ヨハ 19 章 3 節）と罵られるイエスさまの未来の姿と重なります。

イエスさまは、「どこから」来たのでしょうか。イエスさまは一体、「どなた」なのでしょうか。パン、食べる、いのちといった言葉が散りばめられながら、今日から始まる五週間、わたしたちはイエスさまの内奥へと分け入っていくのです。

「分け入っても分け入っても青い山」と詠んだのは、漂白の俳人で有名な種田山頭火でした。ここには、根源へ向かおうとする人の意思と、それには決して到達しない絶望が記されています。しかし、わたしたちキリスト者は違います。イエスさまの内へと分け入れればいるほど、いのちそのものである神さまへと到達することができるのです。